

天明記

颯

御家

庫文閣内		
五	三四	和
函	冊	書
二	七	
架	冊	類
	號	

320  
閣

内閣文庫	
番號	和 34590
冊數	7(3)
函號	150 144

第三

共七



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TMI Kodak





一花柳同金孫名外史川流北國  
以龍池の傍より一之内不貸令わり南國金孫式  
以令の書出の梅式也之腹の令高  
不孝の心誰に在り用はる東の正行局安法房  
重高字の礼もあはれや之丈又如之  
龍信令多ふと云ふと海一止不接局安法房  
但至不心意は地也次席名高令高は令高  
同清法も存るは及不接の心一縁  
名一上小書信入通是は何れ也

長瀬曰席九事

其言及實言兄也也次席南九月十六日  
扱波出奔同人娘也知年一長病既死  
而書不海方手方親親書小書娘人上書  
也一也也次席親親書娘人上書  
十の月一娘八の月一娘九の月一娘  
妻小戸の娘也也也也也也也也也也也  
也也也也也也也也也也也也也也也也  
也也也也也也也也也也也也也也也也

右今既於評定不才自方始也大属于一  
所よりら付経歴より同方井上御之と云ふ

山田

赤井玄康次

又豊前より留し去るに於て山田

河内より留し去るに於て山田 河内 豊前 合

山田

但右如右何なるに依りて

右於て山田中より一海美年分列産後

同月由副掛次市牧也織部上候

山田是也

赤原 伊五郎

其方より先送るに山田は前より一飛脚向屋  
孫之傳内寄上候一併に奉付け候に於て是より上  
吏より此は至り 河内より奉りて右一併に伊五郎  
高井より奉りて掛りて右極め同く奉りて後以味洋  
長より奉りて巨細積入札に御座りておのつる  
不審に御りてのり紙を奉りて札に御座りて







各子海子山實上系遊之積多一子山系烟  
 一凡三子由福子換金相之決一山石烟是  
 系金之由自去石七牛留也換金可債上石  
 留一山石可系山山山山山山山山山山山  
 實留系之石石余一石山山山山山山山山山  
 山山山山山山山山山山山山山山山山山山  
 三三三三三三三三三三三三三三三三三三三  
 山山山山山山山山山山山山山山山山山山山  
 山山山山山山山山山山山山山山山山山山山

命女子百八指六由一子一子一子一子一子一子  
 五五五五五五五五五五五五五五五五五五五  
 一白女百由石石山山山山山山山山山山山山山  
 文文文文文文文文文文文文文文文文文文文文  
 入入入入入入入入入入入入入入入入入入入入  
 山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山  
 山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山

山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山

林 昌 院



其方後南九月十一日長志忠想次命改由奔以  
 自親於乃事今亦改之之娘上子為不幼年  
 之帝病死自親於書娘由人書裁之  
 以自自連改由奔之娘可之方親於共一也  
 以外之子供之之親於及之自之仰  
 可之之想次命娘由人自連改由中表其戶  
 明想出之改之改之改之改之改之改之  
 信一押送之信也

右之候亦深定所大目自 然也 天隔也

了信所より心付信候と 以月日并上御之  
 互合

杉平内務以家来  
 信也 弟也 押

信也 是 物

其方美英是之 無討之帝殺害改之候  
 心也極之扶扱之之候 下之方幸勿之候  
 不揚候之 自得御之 其之之 之何之  
 之其通之之候之 之入之 引合用之 拾子取  
 記一 其手亦不可之 之候 之候 之候

此由也... 後卒勿... 不

伊豫

表部 上野 下野 西房

上信 常陸 山城 振目 相泉

紀伊 大和 飛鳥 甲斐 後河

河内 備前 備中

東海通部 丹波通部

和年... 必... 指

佐友玄由

偏... 七... 表... 乃... 元...

元...

大山費古

六... 徒... 故...

東海の事は子定の行状由人内務以松  
得材名を方以選括し以材合を以て  
しり一以選括を以て是物を勿論行状を  
而金相得材名を以て以て以て以て以て  
亦年中以て以て以て以て以て以て以て  
名流流を以て以て以て以て以て以て  
各子、以て以て以て以て以て以て以て  
順着出流し以て以て以て以て以て

絨巾と後区物之字

由長進細管毎以て以て以て以て以て  
勢を以て以て以て以て以て以て以て  
董陶不法不薄以て以て以て以て以て  
一以て以て以て以て以て以て以て以て  
之言以て以て以て以て以て以て以て  
一以て以て以て以て以て以て以て以て  
ける一以て以て以て以て以て以て以て  
年古事一以て以て以て以て以て以て  
括列一以て以て以て以て以て以て以て

杯よの杯来交糸府とてとての事子け  
るをあらしよの國のわが齋信とてとて  
しるははつと

十二月廿一日

紙中

石仲よ

わが方き存日我黨とてとての事子け  
とての事子けとてとての事子け  
祭系後信とてとての事子け  
頼承とてとての事子け

言のこゝ宛様へ語り師と宛様へおの  
事感のこゝ始保赤も仁として政流は海  
も仁とて感のこゝとてとての事子け  
たもとてとての事子け

梅の力長とてとての事子け  
此をた内とてとての事子け  
是は石仲とてとての事子け  
仲えとてとての事子け

正徳のころ吉仲の嫡子

白川と成申殿と

君民の身成運入と天下の事と事あるに  
いふよりいふ事

一 由来因字解の言葉出来大印奥水三年約  
海の出入成る事と成る事と成る事

一 由来何なるかと事ある事と事ある事  
方宜し何事一統成る事と事ある事  
と事ある事と事ある事と事ある事

一 源治橋本所ある事と事ある事と事ある事

の事ある事と事ある事と事ある事

又長病ある事と事ある事と事ある事

又病ある事と事ある事と事ある事

又病ある事と事ある事と事ある事

又病ある事と事ある事と事ある事

又病ある事と事ある事と事ある事

又病ある事と事ある事と事ある事

又病ある事と事ある事と事ある事

比齋英く成りし中舎よる石く何海く之れ  
未行ん出日

戊申四月

啓書

- 一 淫酒を卑世し地形
- 一 淫忠を必誦するの梁
- 一 苦言を榮花の礎
- 一 儉約を若菜比ふの抄本
- 一 滋味味脂を又の柱

- 一 多言意多の身と換へ根を
  - 一 仁情をあはれ海の身
  - 一 花葉を借金の板を
  - 一 淫度と僕をさすの板
  - 一 我侯と明交は海の海子
- 石十ヶ条杉半御中、及申多洋山内御及此海  
 啓書、可也候、果然て忘らぬとあり

丁未  
十二月



飯上江戶を可し海至る一宿とせり

但今々怪安と云ふ紙と云ふは右指紙の事

比若くして此と云ふ事の御出

右の御出の代友私に於て此の地以て社

領とし有儀は云々

丁未 八月

大月廿日

一 享保通申法人の学文新書等日々漸新

系林大学以て此の御出の事云々以て後日

朝の御出の御出の内漸新の事云々右様

志の御出の御出の御出の御出の御出

御出

右の御出の御出の御出の御出

丁未 九月

大月廿日

近來は何人か事をも何くは人自之に理を

人々所名をわん彼是格威と堪いし故亦く聖流

ホッソリと御出代法に御出の御出の御出



早稲作の者よりゆりて早稲の種名も人  
の名も取て之をわきまに記す所の事  
も早稲の種名も取て之をわきまに記す  
所は早稲の種名も取て之をわきまに記す  
武士の種名も取て之をわきまに記す  
下りて早稲の種名も取て之をわきまに記す  
早稲の種名も取て之をわきまに記す  
早稲の種名も取て之をわきまに記す

丁未  
九月

大目目

去りて早稲の種名も取て之をわきまに記す  
早稲の種名も取て之をわきまに記す  
早稲の種名も取て之をわきまに記す  
早稲の種名も取て之をわきまに記す  
早稲の種名も取て之をわきまに記す  
早稲の種名も取て之をわきまに記す  
早稲の種名も取て之をわきまに記す  
早稲の種名も取て之をわきまに記す  
早稲の種名も取て之をわきまに記す  
早稲の種名も取て之をわきまに記す

笑のけ

丁未 九月

八月十日

近き十段米良段高連の米未くはるは誠言  
り此の流由道もは道米高の白米の道此  
橋の河道に申段高の中申高の如南尖  
河外列の米穀は流の道もは流の道  
米言の二止の酒道の流方高又南尖  
お酒の酒道に申橋印の米物は流の道

承高の酒一造高の酒一と利得の物  
ナも増道お酒の如高の賣買の如  
お酒の米の酒の酒の米の酒の酒の酒  
下難お酒

右の酒の如く其酒を竹内代友松段の酒  
と地味の高を味の上の酒の酒の酒の酒  
造お酒の酒の酒の酒の酒の酒の酒  
出方の酒

丁未 十一月



明和の年おのり通定より大名に人扱は出  
て申すもいふ端人扱に申すありし所別と申す  
名法の人扱は申す小治に因り捕りて申す  
りし切捨の御しに右御に申すこと運滞は  
お集りて多勢に申す却りて及申す小治に  
因り捕りて切捨の御しに申す名法の御し  
次第に申すは貴族の御しに申す後申すは  
大勢に申すありて取扱の御しに申す不  
申す是れ以て申す御しに申す及申すは

右に申すの御しに申す  
申すの御しに申す

申す 正月

大目目

け申す申す大目目 捨申す申す  
に御しに申す外賣買一切を信止し申す  
申す申す申す申す申す申す申す申す  
申す申す申す申す申す申す申す申す  
申す申す申す申す申す申す申す申す  
申す申す申す申す申す申す申す申す



揚子江の順私領支社のてお解

申二月

松平誠中より反り候所の書

大目付

諸公酒造し奉旨令と道来、酒造米言  
兼採り下書有以科と其所、奉行私領  
と領地以下以部定所より、後中支社  
候より、下書有以取集、是亦以部定所

可成る事

申三月

大目付

氣以、江州通候之場、度々我より、  
のり、通其候上、是候中、陸人、亦江戸抱  
列、候より、是、海あり、候、新、所、名、  
百、連、り、面、より、下、り、候、皇、口、通、御、候、  
是、候、所、候、所、候、是、以、候、所、候、  
為、安、候、人、候、所、候、不、お、解、候、所、候、

いづれにふらふあつ仕立のやうにせむいふも  
き中若事あはる及やせきも信し給さう四ノ流メ  
月當り所よりおのゝたあ

但此死き御とて及あ紀より所より  
のし

一人若も人許何言堂流し端はつて先子より  
けよりお許か海にたつて人方と取あま  
ふも流るゝ及逃さるはれ其南人か幸後初  
茶順正の川水流又たきり流さるはれ

商人より海をくわてあまらるはれ所より  
し海をくわて商人物を並佐士又と信し  
及けけよりおあまらる人いふも書物  
通わら流るはれ

あつ流るはれ  
申八月

天明六年十月廿六日

後明院様御達にお進呈被下候也

一 伊原風之奴  
豊舟匠 日光 伊門跡

一 右月剛  
探幽画 随宜 乘院官

一 卯服若  
兼光 竹合古十段 尾浪大洞言殿

一 月  
長成 口打 紀伊中細言殿

一 月  
基光 竹合古十段 水戸宰相殿

一 月  
康光 口三 紀伊中細言殿

一 月  
康光 右月 尾浪宰相殿

一 月  
家卯 右月 紀伊中細言殿

一 月  
決光 右月 桂川右馬介殿

一 月  
兼光 竹合古十段 尾浪大洞言殿

一 月  
兼光 口三 尾浪大洞言殿

一 月  
竹合古十段 尾浪大洞言殿

伊原風之奴

右月人

口打 尾浪大洞言殿

口打 紀伊中細言殿

口打 水戸宰相殿

口打 紀伊中細言殿

口打 尾浪宰相殿

口打 紀伊中細言殿

口打 桂川右馬介殿

口打 尾浪大洞言殿

口打 尾浪大洞言殿

口打 尾浪大洞言殿

口打 尾浪大洞言殿

口打 尾浪大洞言殿



一回 沼川清徳 口高柳中 松平陸奥守殿

一回 猶赤康之 口口人 松平誠希守殿

一御砂鉢 口口人 松平伊之守殿

一御書翰 口口尾原守 松平新守殿

一御砂鉢 口口人 松平隠岐守殿

右一箇以上使 と云

一御指 口口桑吉則付守殿  
口口服左重光守殿 宮内卿殿

一回 口口如別殿守  
口口服左重光守殿 兵部卿殿

一回 口口服左重光守殿 刑部卿殿

一御巻物 口口桑吉則付守殿  
口口服左重光守殿 松平昌之守殿

一回 口口馬之國口口 松平以之守殿

一 種姫君 口口袴濱守殿  
口口香柳 松平外守殿

一 御縁女様

三月花多未缺 御縁寺帖 哥八云 承元 承元 承元  
画 久世三位 卯見 卷 寺 佛

一 運光院様

御縁 御縁寺帖 大 承元 承元 承元  
銀山 花瓶 寺

一 宮内省及内膳中

十二月 花多 未 承元 承元 承元  
卯泊 香 知 承元 承元 承元

一 安祥院殿

川 香 燈

一 定非御方

月 次 花 多 未 承元 承元 承元  
承元 承元 承元

一 園諦院

捨 遠 和 奇 葉 承元 承元 承元

一 松平之膳更書

派 承元 承元 承元  
承元 承元 承元

一 河井之厨更書

承元 承元 承元  
承元 承元 承元

一 志合院

百 承元 承元 承元  
承元 承元 承元

一 中 通 寺 進 之

一 鳥 獸 寺 也

承元 承元 承元  
承元 承元 承元

一 九 十 賀 卯 寺 燈

承元 承元 承元  
承元 承元 承元

一 土 月 花 多 和 次 寺 燈

承元 承元 承元  
承元 承元 承元

一 土月 卯子 卯辰 卯辰

水野 山 卯 子

一 西湖 八 系

鳥井 丹 辰 子

一 御掛物 親音 探幽 子

酒井 石 辰 子

一 日 響 長 卯 辰

右 日 卯 辰 辰

一 日 富士 日 辰

山 辰 辰 辰 辰

一 日 虎 日 辰

酒井 辰 辰 辰

一 日 龍 日 辰

井 辰 辰 辰 辰

一 日 日 日 辰

杉 辰 辰 辰 辰

右 一 通 以 遠 如 於 大 矣 子 卯

一 御花籠

寺 封 初 辰 辰

松 平 辰 辰 辰

林 辰 辰 辰 辰

右 同 所 自 掃 經 辰 辰 卯 辰 卯 辰 卯 辰

一 御刀 代 倉 辰 辰

以 側 辰 辰

日 辰 辰 辰

一 日 蕭 光 日

横 日 辰 辰 辰

一 日 壽 命 日

右 井 辰 辰 辰 辰

一 日 豐 後 統 行 日

右 日 辰 辰 辰 辰

一 日 正 則 日

松 浦 辰 辰 辰 辰

一 日 行 由 日

西 辰 辰 辰 辰

西九の例九

一日流行 代令七投

松平因幡 与

一日兼定 口

小笠原五枝 与

一日兼言 口

小出去佐 与

一日兼光 口

四浪能少 与

一日祐定 口

大久保下也 与

右の例九

一 官内如殿

合意可あり

一 氏部如殿

一 令部如殿

此部如殿

松平梅申 与

柴田修徳 与

角南三枝 与

山平作 与

末吉如美 与

山口能重 与

松平威了 正

二年自三年如殿 与

此部如殿

此部如殿



一合山文苑  
一田子文苑  
一銀之枚苑  
一金山文苑

坊之池取山人  
同六人九八八  
二九更坊之六人  
同六尺七人

一合山文苑有原一画  
中書  
新人人坎坎 之与去處  
皆川市正 不平所  
水冲水冲 均井去處

呂井和采  
平笑式取上補  
新是甲斐

竹山八腰毫 竹世吾原  
細井平後 平園松  
水冲物 亦井境九師  
右原 似世之文 萩末平後

内友河内  
友堂市十師  
石谷直三師  
平笑伊斐

中道令女中上下左右

一合山文苑 高岳 瓦屋 桑盤井  
百里小路 涉川 野山  
砂野

一合百五元

岩 津山 高 岳  
川 渡 次 松 山

あ ん ち く ち

一月

あ ち ち

北 林 ち ち

山 口 友 也 小 中 田

中 込 昌 川 表 使 昌 也

馬 堂 康 也 岩 生

一月七拾五元

一月六拾五元

小 山 清 田 昌 文

川 井 運 足 ち ち

く ら 何 七 ち の

く ち ち ち 代

の の ち ち

く ち 人 ち ち

ち ち ち ち

き く ち ち ち ち

日切之入  
其股以之入  
其股以之入  
其股以之入  
其股以之入  
其股以之入  
其股以之入  
其股以之入  
其股以之入  
其股以之入

石一也 四三合之

一合之拾也  
日松便表以之入  
日末底以之入  
日末底以之入  
日末底以之入  
日末底以之入  
日末底以之入  
日末底以之入  
日末底以之入  
日末底以之入

一金山拾也

一曰拾也

石一也 四三合之

一合之拾也  
日末底以之入  
日末底以之入  
日末底以之入  
日末底以之入  
日末底以之入  
日末底以之入  
日末底以之入  
日末底以之入  
日末底以之入

俊明院  
中利  
中利  
中利  
中利  
中利  
中利  
中利  
中利  
中利

包女  
拓得院

中春  
息言  
拓得院

拓得院

拓得院



清洲半  
活芳院

一 仰中光 晴人院

一 仰渡口 甘法半 林照院

一 仰渡口 甘法半 林照院  
延保格内方少晴此寺所とて新院  
此中兼取品介とて之り

表使 月不院  
表使格 宗伝院  
氏中半  
活珠院

仰次氏 泉 邑

仰祐策 妙 院

一 種姫格 仰入雲 山月 水海人 也

一 種姫格 仰入雲 山月 水海人 也

一 種姫格 仰入雲 山月 水海人 也

一 種姫格 仰入雲 山月 水海人 也

一 種姫格 仰入雲 山月 水海人 也

一 種姫格 仰入雲 山月 水海人 也

一 種姫格 仰入雲 山月 水海人 也

一 種姫格 仰入雲 山月 水海人 也

一 種姫格 仰入雲 山月 水海人 也

一 種姫格 仰入雲 山月 水海人 也

一 種姫格 仰入雲 山月 水海人 也



西門表地高し有る人 井橋山門分平恒後も  
名交進不平月好も板倉恒後も神岡徳中  
門水高も人 福永中後も船邊中門根より  
井上流後も名交進也有堂和泉も不平和泉も  
不平恒後も不平恒也 西尾隠後も井上流後も  
名交進也西門進 不平下伝も株永式も備  
不平恒後も

一 天明 戊申年 八月廿二日 大洲 備文 其浦

し二市果り 活も後後も世子流後も友の竹後も  
会足其浦石流以し目し 狭しは長太郎交代を  
命とん大洲 活も及る<sup>おま</sup>岸の律夫をゆえの心あり  
て云やより大洲 云もも 初も浪花より清地物と接  
戸路を控て固山、未り之是より漢州、後海して  
高智の流、ゆると之備、清地百里余りの新地を  
名、よ地歴せし心志の考りて一まずし  
一 將軍よ、八天性豪族の君とゆへん、備佐の長  
悪友くハあハ如くハ一 白河彦博佐の御小

あつちよしも尾紀水の上君の心でいふ人

一 或は又八の時以 將軍の道徳の人をいせうふ

御中もいさやありやえて来れははるる時

に早下減行とまよふれいまより道徳の人しんは

と道徳をいひていふことし 中切右のmん

あれも新道徳をいふことし

一 將軍の道徳ハ御中八の 中切右のmん

あつちよしも去りて道徳の道徳をいふことし

た八師ハ左の道徳の子らわすれし共せうふ

一 忠以師をよまし御しかく南陽人の愛ふ者哉

あつちよしも去りて道徳の道徳をいふことし

あつちよしも去りて道徳の道徳をいふことし

あつちよしも去りて道徳の道徳をいふことし

あつちよしも去りて道徳の道徳をいふことし

あつちよしも去りて道徳の道徳をいふことし

あつちよしも去りて道徳の道徳をいふことし

あつちよしも去りて道徳の道徳をいふことし

一 將軍の道徳ハ御中八の 中切右のmん

小粒をよき由添銀を斤より小粒銀を月を焚く  
お多し見ハ天下の財をくすめふ 上十八  
いゆと見、志らしむれぬ事ぬへし其令を致  
取らしむる小利十両の事、由月は公にれし高  
由月は公より由月しはれそを令おしはる  
由添銀一斤をより小粒銀又の海に由添銀を  
天下の財をくすめふとめを食取の者由添銀  
ゆれて食えしきおるもよし志つる者錢をゆ

多しとて昂時小粒をくすめて添死を造れぬ  
よれハ公金の事、令添銀を昔の事ハての笑加ふ  
ふりし事、いとけりしれりし見、おしはれ  
造りの人、暫時中造り届もわづかへしは沖舟へ  
あつしおられし事、よしとれハ白河侯御名も  
中代はへしとて鹿候しむる 將軍殿も  
仰、けりし事、大馬じし白河侯、信りし事、  
侯は御名持てゆりし事、大馬の故案候してゆり  
ん事、んへしとておしはれし事、おしはれ



それし交へはき一由へ小倉小堀小入平井造平  
西九もあて敷一もしれり人小後せり以皆所 中前  
何れ一てぢいハ又それし位き一造か一とてけり  
造平ハ予り何れ一由のせ居て 上一徳の郎中ハ  
中居き一由の造平出所の機とさし一り 西九後ら  
中居き一由一徳の由れり一はハ一由一徳の少政大機  
田居居るりハハ一徳又も及れし何きも城の由りお和つ  
りれハ造平ハ一由の由れり一とて一由一徳の造平ハ  
せりれり一由一徳の由れり一とて一由一徳の造平ハ  
他て人等しハハ一由の由れり一とて一由一徳の造平ハ  
ありし一由一徳の由れり一とて一由一徳の造平ハ  
眼一ハハ一由一徳の由れり一とて一由一徳の造平ハ  
然れ所も刑ハ一由の由れり一とて一由一徳の造平ハ

一 田舎の世居異は右伸のさハ却中と教いよ  
有徳院様似せりハ一由一徳の由れり一とて一由一徳の造平ハ

何しし之年ハ右伸とハ一由一徳の由れり一とて一由一徳の造平ハ  
ハハ一由一徳の由れり一とて一由一徳の造平ハ  
洋小下とて一由一徳の由れり一とて一由一徳の造平ハ  
東投せ一由一徳の由れり一とて一由一徳の造平ハ  
何人ハ一由一徳の由れり一とて一由一徳の造平ハ  
然れりハ一由一徳の由れり一とて一由一徳の造平ハ  
らん一由一徳の由れり一とて一由一徳の造平ハ  
より一由一徳の由れり一とて一由一徳の造平ハ  
白河屋と一由一徳の由れり一とて一由一徳の造平ハ







忘れてもその事おんもあつと治れり

一 白河侯の著述、張汝舟に書らるる眞浦氏に  
し書の事と石仲、内山、如中、赤くし著述に  
席思意を以て向ふ如中、其浦氏に書  
如中、中一、これ、是、朝廷の旨を論一、  
書とて今く、西政事、に拘分、事、あり、地、を、許、す、は、と  
言、う、ひ、と、し、

一 白河侯東旅の邸小虎を遣へて、し、と、て、其、職  
事、の、事、を、後、に、せ、ら、れ、る、事、に、及、百、令、の、費、用、あり、と

おせつ、は、是、の、元、の、方、の、お、ん、も、宛、を、張、汝、舟、の、事、に、ハ  
容易、あり、と、して、是、時、に、お、ん、も、十、人、に、信、守、を、以、て、  
侯、小、虎、を、お、ん、も、せ、ら、れ、る、事、に、及、張、汝、舟、に、卷、を、以、て、  
お、ん、も、の、事、に、信、守、を、以、て、せ、ら、れ、る、事、に、及、自、り、と、し、  
あ、つ、て、其、事、は、し、ん、と、し、る、事、に、及、お、ん、も、の、事、に、  
又、お、ん、も、の、事、に、及、お、ん、も、の、事、に、及、お、ん、も、の、事、に、  
の、向、く、大、學、の、用、意、に、及、お、ん、も、の、事、に、及、お、ん、も、の、事、に、  
僕、お、ん、も、の、事、に、及、お、ん、も、の、事、に、及、お、ん、も、の、事、に、  
其、の、ハ、カ、り、と、し、る、事、に、及、お、ん、も、の、事、に、及、お、ん、も、の、事、に、





東耶流外して是成り人ありと申心及の  
祝せし成心して石取示を給ひよけて物と  
申く御共々多ふ所をわらひと強りまひ  
とらしむる一々高田君の中ら厚心及  
と成りとあふいし致れやと有り白河の位階  
とて高田君の御連極と申交 上、世と云ふ  
し高田君成り候しと申感も、余りありと  
眞備氏の御あり

一 高田君の御あり候しと申感も、余りありと

汗ありて候えしと申御心と申候え  
汗のたれと候えしと申候えしと申候え  
御中と候えしと申候えしと申候えし  
世も高田君と候えしと申候えしと申候えし  
高田君の御連極と申交 上、世と云ふ  
し高田君成り候しと申感も、余りありと  
眞備氏の御あり

一 公秋小常法より祝木井造物組林清の八市し  
る人 御中より及上書ありし事こ 旨執政の私を  
て下下の所為大官中 改訂案と認めて私より心  
於此の政事 以改革の事を許りしハ意味の事  
入此の事 幸甚公美懐仁切致しん處 亦極々御事  
後 亦少少事書上りし 其秋甲申 改訂免し 其  
所 亦追来教し 亦北女ヲ抱致す 亦少少 亦少  
行 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中  
一 其浦氏の御説し 以上書の一巻を其浦氏より  
予より 其説の中 亦少少 亦少少 亦少少

一 其浦氏石仲の回ひし 白河産物改し 亦少  
一 其浦氏の御説し 以上書の一巻を其浦氏より  
予より 其説の中 亦少少 亦少少 亦少少

一 其浦氏石仲の回ひし 白河産物改し 亦少  
一 其浦氏の御説し 以上書の一巻を其浦氏より  
予より 其説の中 亦少少 亦少少 亦少少

し、半信人、森の山、ゆき、て、下、お、歌、は、の、事、の、  
あ、ぬ、者、ゆ、と、信、れ、れ、れ、の、人、ひ、ん、の、違、ひ、正、入、  
ゆ、し、と、早、く、取、お、れ、る、ま、う、入、ら、る、と、う、り、  
伊、豆、も、後、仰、加、判、し、判、し、命、あ、り、し、と、い、

一 国田平物とちう人の事を箕浦の事といふ  
平物ハ篤そのら、是、量、わ、く、人、多、く、白、河、に、い、  
集、く、る、ま、ん、て、る、を、變、向、し、し、と、い、し、は、所、し、ま、  
の、代、見、ひ、し、人、し、ま、し、の、事、は、し、し、け、ん、必、  
る、あ、ら、何、の、中、役、ま、し、信、信、し、評、判、せ、し、と、い、

け、ん、の、事、同、果、の、信、又、と、揚、の、事、わ、く、し、人、し、  
し、ま、し、

一 箕浦氏伝より小野芹といふ書を信ありて代  
房、お、し、是、り、和、美、陣、正、少、所、致、の、著、即、と、  
執、政、お、し、お、り、ゆ、ゆ、の、事、も、政、事、を、論、を、れ、し、  
書、の、り、小、ま、か、し、の、感、し、し、と、い、は、る、

一 今年の変、白河、彦、右、仲、と、信、あ、り、と、い、は、る、  
去年の変、加判の列を、歌、は、り、し、し、と、い、は、る、  
森、食、を、し、ま、し、性、多、病、な、れ、の、氣、根、も、病、く、し、て、

跡原をいさへし何れも

仰知君を懐之なり天卜に女嫁し思ひを懐く

半を中へいさへし思へば不肖の繁中へいさへし

瑞る半を果し思ふのいさへし思へば何れも

何年四海縁澄かへん半と思思ふに身をもふ

任短きの短きなり初のいさへし思ひを懐く

瑞ハ懐く思ふなり半を思ひを懐く

思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

一 乙三師兄真浦左保以り平も於東都集く

任来一思えくえま一の足真浦守八と云ふ

人平初と京都小町一以古依この丈人更白

むも店と長つ差積り持く位一町守八も

思使と共なり平も同く長つこの師と云ふ

平の中お長つこの町守八もお御と云ふ

廣、湯浅の長つこの方任来なり思ふ

い師の長つこの町守八もお御と云ふ

町守八もお御と云ふ

君も思使なり思使なり思使なり思使なり





きんじと一とさし同れを乞ハ平々ハ、こしん  
あゝ海にやうに能くは枝葉をくとして又さう  
慈母の形状を伴て字に列すの由道也  
まゝ海へ一とさし海にわつて今ハ平々  
と後中、洋へし文一海にわつて今ハ平々  
文一平々の中ハ情をにしとさし平々  
母と友をて能く馬をくして又さう平々  
世の信漢道方也以て一とさし平々  
平の所ハ川に流れて能く母と友をて能く

のるはく心をさし平々一とさし平々の命をて  
父母所被一とさし相被をく究揚りて固中とさし  
人の心を携れて形く大月と一人ハ命をせられ  
ぬ者ハまのそくして平々にしとさし平々の文をさ  
して傷友ハおわれ平々にしとさし平々の命をて  
錦を揚りて傷友ハおわれ平々にしとさし平々の命をて  
平々地の心を傷りて能く平々にしとさし平々の命をて  
大洲、大洲とさし平々にしとさし平々の命をて  
文一平々の中ハ情をにしとさし平々の命をて

あまのこゝろのまゝに  
あまのこゝろのまゝに  
あまのこゝろのまゝに  
あまのこゝろのまゝに  
あまのこゝろのまゝに

天明死巻之三

